

高级

日本語教程

杨晓钟 张忠锋 主编

陕 西 人 民 出 版 社



序

中国与日本有着两千多年的交往历史。在古代，日本从中国吸收了大量的文化营养，尤其是中国汉字以及汉字读音，给日语增添了新鲜的活力，进一步丰富了日语语言。而到了近代，中国则通过日本学习西方，并学习日本。20世纪80年代，随着改革开放，中国与日本交往日益频繁，随之而来的学习日语的热潮，越来越高。近几年，在全国各大学以及各种语言培训学校开设日语教学班的越来越多，枚不胜数。但是，一般学校开设的日语教学班，大多数都是围绕基础阶段的教学，真正能开设高级日语专业的主要是集中在全国几所外语院校或者个别大学的外语系。所使用的教材，各学校都不相同，可以说是因人而异，各有千秋。总之，初中级日语教材多，高级日语教材少，这是当前的现状。走进各大城市的新华书店查看，除了有上海外国语大学编写的《高级日语》之外，几乎少见。为此，能有更多的日语教材问世，给各大学日语教师和学生有多个选择，形成竞争，对教材内容和知识的更新换代，大有益处。

西安外国语学院日语系组织高年级教师集中编写的供大学本科日语专业学生使用的《高级日本语教程》，可是说是锦上添花。该书主要由日语系副教授杨晓钟、张忠锋两位老师牵头负责编写，全书共26课。

目前，国内各大学自己编写日语高年级教材多偏重文学作品，而该教材则一反常规，主要收录日本近现代名人、名作家的随笔、评论、座谈等题材

内容，全面包容日本语言、文化、社会、民俗、体育、环保等与我国日语教育实情有关的、实用的新知识。

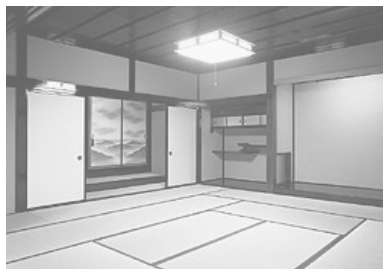
该书在编写体例和结构上很有特色。每课内容由正文、作者介绍、疑难词解释、文章分析、练习等 5 个部分构成。为了能帮助和加强学生对课文的深刻理解，特意在课后增添了与本课文内容有关的“关联知识”和“插图”，使其文章内容图文并茂。从教学角度讲，这样做，在一定程度上可以消除因印刷死板而产生的视觉上的疲劳，也可以提高学生的兴趣和主动性。

主要编写人杨晓钟、张忠锋副教授从事日语教学近 20 年，具有丰富的教学经验，他们先后参加过《初级日本语》、《中级日本语》、《日语基本动词用例词典》、《日语教程学习指导》等多部教材、辞书的编写工作。所以，该教程的写成多是来自他们教学第一线丰富的实践。该书在出版之前，已经在西安外国语学院日语系学生中连续用过两年，学生反映极好。现在，该书终于由陕西人民出版社正式出版了，为此，我非常欣慰。这无疑给全国日语教学增添了又一部新书，也是一件好事。

中国日语教学研究会常务理事兼副秘书长
西安外国语学院日语系主任、日本研究所所长

张升余

2004 年 7 月



前 言

《高级日语教程》是专门为大学日语专业高年级学生编写的一部既可作为精读教材，又可作为课外读物的教科书。鉴于国内日语专业高年级教材偏重文学作品的现象比较多，同时，为了与我们学院日语专业编写的其了教材配套使用，本书共收录日本近现代人名作 26 篇，体裁有随笔、评论、座谈等，汲及内容包括有关日本的语言、文化、社会、民俗、体育、环保等各方面的知识，在帮助学生学好日语，提高日语阅读能力的同时，也为扩大学生的知识面，全方位地了解日本构筑一个坚实的平台。

为了便于教学，本书课文由课文、作者介绍、疑难词解释、文章分析、练习 5 部分构成。此外，为了帮助和加强学生对课文的理解，还有相当一部分课文增添了与本课文内容有关的“关联知识”和“插图”。图文并茂，在一定程度上可以消除排版单调而产生的视觉上的疲劳，也可以从侧面提高学生学习日语的主动性和积极性。

本书作为正式教材在我院日语专业课年级已使用两届，取得了良好的教学效果。为进一步扩大和加强与其他各兄弟院校的日语专业同仁之间的交流，在试用的基础上，经过多次修改，决定出版本教材，以供参考。当然，其中不可避免会出现一些错误和不足之处，诚恳期望诸位专家及读者及时给予批评指正，以便我们在今后的编写工作中进一步改进和提高。

编 者

2004 年 7 月

目 录

序 (1)
前言 (1)
第 1 課	I Was Born(1)
第 2 課	「はい」と「いいえ」のあいだ.....(7)
第 3 課	迷う犬..... (16)
第 4 課	夕顔..... (29)
第 5 課	言語と記号..... (45)
第 6 課	言葉と身体..... (56)
第 7 課	母国語の能力..... (68)
第 8 課	私の文章修業..... (80)
第 9 課	言語の幻想..... (93)
第 10 課	ハイテク化と人間のゆくえ..... (101)
第 11 課	対談 人間はどこに向かっているのか..... (118)
第 12 課	「共生」とは何か (134)
第 13 課	現代の個人主義..... (149)
第 14 課	四畳半の発見..... (162)
第 15 課	初日影のなかで..... (172)
第 16 課	常識と良識..... (184)
第 17 課	水は天から貰い水..... (197)
第 18 課	弱者生存..... (215)
第 19 課	コロンブスの卵..... (226)
第 20 課	日本の耳..... (238)
第 21 課	富士幻想..... (259)
第 22 課	海上の道..... (274)
第 23 課	日本人の心とかたち..... (297)
第 24 課	「記憶してください。 (309) わたくしはこんなふうにして生きてきたのです」
第 25 課	日本文化の雑種性..... (319)
第 26 課	「である」ことと「する」こと (341)

第1課 I Was Born

吉野 弘

確か 英語を習い始めて間もない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと 青い夕靄の奥から浮き出るように 白い女がこちらへやってくる。物憂げに ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から目を離さなかった。頭を下にした胎児の 柔軟なうごめきを 腹のあたりに連想し それがやがて 世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎた。

少年の思いは飛躍しやすい。その時 僕は 生まれるということが まさしく 受身 である訳を ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

やっぱり I was born なんだね

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生れさせられるんだ。自分の 意志ではないんだね

その時 どんな驚きで 父は息子の言葉を聞いたか。僕

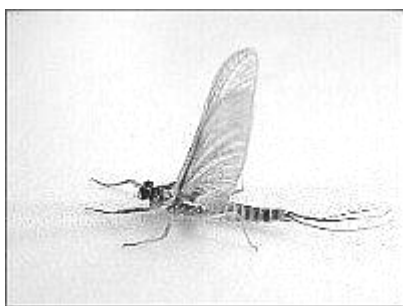
の表情が単に無邪気として父の眼にうつり得たか。それを察するには僕はまだ余りに幼なかった。僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかったのだから。

父は無言で暫く歩いた後 思いがけない話をした。

蜉蝣という虫はね。生れてからに、三日で死ぬんだそうだが それなら一体 何の為に世の中へ出てくるのかと そんな事がひどく気になった頃があっただけ

僕は父を見た。父は続けた。

友人にその話をしたら 或日 これが蜉蝣の雌だと言って拡大鏡で見せてくれた。説明によると 口は全



く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても 入っているのは空気ばかり。見ると その通りなんだ。ところが 卵だけは腹の中にぎっしり充満していて ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで 目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが 咽喉もとまでこみあげているように見えるのだ。淋しい 光りの粒々だったね。私が友人の方を振り向いて 卵 というと 彼も肯いて答えた。せつなげだね 。そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ、お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは 。

父の話のそれからあとは もう覚えていない。ただ一つ痛みのように切なく 僕の脳裏に灼きついたものがあった。

ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた
白い僕の肉体 。

著者紹介：

吉野 弘[よしのひろし]1926年(大正15年)～。詩人。山形県生まれ。川崎洋・茨城のり子らの同人誌「櫛」への参加を経て、1957(昭和32年)年に第一詩集「消息」を刊行。平明な言葉と深い心の優しさをてことして現実を見渡していく作品を多数生み出している。主な詩集に「幻.方法」「感傷旅行」「北入曾」「自然渋滞」などがある。

言葉の解釈：

かげろう【蜻蛉】(名) カゲロウ目の昆虫の総称。形はとんぼに似ている。春から夏、水辺に飛び、成虫は交尾。産卵を終えると数時間で死ぬ。

ものうい【物憂い・懶い】(形)「もの」は接頭語。なんとなく心が晴れず、だるい。憂うつで気が進まない。「どこかで時計が なく一時をうった」

きがね【気兼ね】(名.自サ) 他人に対して気をつかうこと。遠慮。「 して暮す」「 なく付き合う」

うごめく【蠢く】(自五) はっきりとでなく、全体がわずかに絶えず動く。もぐもぐ動く。うごうごする。おごめく。「闇の中に なく人影」

ひやく【飛躍】(名.自サ) 勢いよく活動すること。

りょうかい【諒解】(名.他サ) 事情を汲んで承知すること。諒承。了解。

げげん【怪訝】(形動) 不思議で合点のゆかないさま。「
な顔」

むじゃき【無邪気】(形動) 邪心のないこと。わるぎのないこと。「ないたずら」。深い考えのないこと。考えの単純なこと。「そんななことを言っていられない」あどけなく、かわいらしいこと。「にほほえむ」

せつない【切ない】(形) 圧迫されて苦しい。胸がしめつけられる思いでつらい。「き恋は持ちたれど」。「い思い」

のうり【脳裏・脳裡】(名) 頭の中。「をかすめる」「に浮ぶ」

ゆうもや【夕靄】(名) 夕方に立ち込めるもや。

いのふ【胃の腑】(名) 胃。胃袋。

いきしに【生き死に】(名) 生きることと死ぬこと。せいし。しょうじ。「の境」

関連知識

「I was born」「夕焼け」「祝婚歌」、吉野弘の作品の中では、この三つがよく知られている。そのうち「夕焼け」「祝婚歌」は、どちらも5人に作曲されていて、「最もよく作曲された詩」の座に輝いた。

「I was born」が作曲されていない理由は、長いことに加え、父と少年の会話が全体の1/3を占めていて、歌うには不向きな詩だと思われる。

学習の手引

- 一、「I was born」という語句は、この詩全体にどのような印象を引き起こしているか、
- 二、「僕は興奮して父に話しかけた。」とあるが、「父」に話しかけるまでの「僕」の気持ちの動きを整理してみよ。
- 三、「父」はどのような気持ちで「蜉蝣」の話をしたと考えられるか。説明してみよ。
- 四、「父」の話を聞いた後、「僕」はどのような思いを抱いたか、話し合ってみよ。
- 五、「I was born」について。「僕」の生に対する考えや感じ方はどのように変化していったか、まとめてみよ。

練習

- 一、次の語の読み方を確かめ、その意味を調べてみよ。

宵 物憂げ 気兼ね 怪訝 撰る 腑 肯く

- 二、次の語句中の下線部の仮名を漢字に直せ。

- 1.寺のけいだい
- 2.ゆうもやが見える
- 3.たいじ教育
- 4.じゅうなんなうごめき
- 5.ひやくした思い

6. かげろうという虫

7. のうりにやきつく

8. いきぐるしい空気

三、次の語句中の下線部の漢字の読みを示せ。

雄犬 雄牛 木登り 木立 背中

上背 背く 為替 名残 茶色

宿直 正直 師弟 兄弟 面目

弟子 目的 茶話会

第2課「はい」と「いいえ」のあいだ

川田順造

もう十年あまり前のことになる。私は咳のひどいかぜをこじれさせたのがもとで声帯をいため、医者から一ヵ月ほどのあいだ声を出すことを禁じられていた。かぜの方はもう直っていて、声が出せないという以外、からだの故障はなかった。その頃私は大学の助手をしていたので、毎日研究室へ通い、いろいろな人と話をしなければならなかった。相手の言うことは普通に聞こえたので、私の言うことだけ紙に書いて見せる。筆談用のメモ用紙と鉛筆をいつもポケットに入れて持ちあっていた。だから私の発言はすべて記録されていることになり、夜、その日一日の自分の語録を読みかえしてみるのはなかなかおもしろかった。

しかし、相手の発言や問いに対して、私がことばで意思表示をしなくてすむときは、勿論私は首の振り方で答えていた。そのとき私が感じたのは、日本語の日常の会話、とくに親しい人のあいだでは、否定疑問形が実に頻繁に用いられるということであり、同時に、それに答えるときの首の振り方がいかにむずかしいかということであった。折悪しく、私は生まれてはじめての外国生活だった三年近いフ

ランス留学から戻ったばかりで、相手の肯定疑問に対しては、肯定で答えるときはOUI、否定ならNON、否定疑問に対して肯定の答えのときはSI、否定の場合はNONという習慣（私自身、それを身につけるのが大変むずかしかったのだが）がついていた。ところがこの方式で首を振ると、否定疑問に対する答えの場合、日本では相手に誤解を生じさせることが多い。

たとえば、私が声を出せないということを知らない人と出会ったときの用意に、私はボール紙に「いま声帯をいためて声が出せません」と書いたものを、いつもポケットに入れていた。しばらくぶり出会った友達が、声をかけてくる。私は黙ってその紙を見せる。相手は、それは知らなかったというように驚き、「全然声が出ないの？」と訊ねる。私は「NON、全然声が出ない」というつもりで首を横に振る。相手は、「じゃあ、少しは声が出るの？」私はもう一度かぶりを振る。相手は当惑して、「どっちなの？」ときく。私は今度は紙に、「全然声が出せない」と書く。相手は、なるほどそれは可哀そうに、という表情になり、「で、熱はないの？」　そうら、まただ！

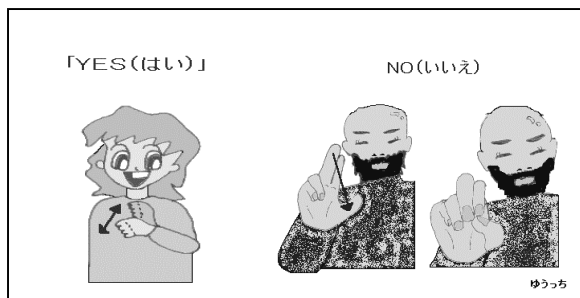
ここで私が「NON、熱はない」というつもりで首を横に振れば、また同じことが繰り返されるのだ。

親しい人のあいだで否定疑問が頻繁に用いられるのは、話し手の同情、危惧、願望、勧誘などが籠められていることの自然な表れであろう。また同じ問いでも、否定疑問にした方が、肯定疑問のむきだしの感じをやわらげられることが多い。「熱はありますか？」と、医者のような冷静中

立の訊ね方をするより、「熱はないんですか？」と否定疑問できく方が、相手に対する思いやりが籠もっている。この場合、「熱がなければいいが」という気持ちが問いかける側にあるからこそ、私が首を横に振れば混乱が生じるのであろう。熱がないときには、私は答えの内容との論理的な整合性はわきにどけ、相手の気持ちを素直に受けて、首を立てに振ればよい。首を横に振るといのは、相手がこちらへ差し向けたものを拒むことになり、むしろ、「ところがそうじゃない、困ったことに熱があるんだ」という感じを表すのにふさわしい。だがそれにしても、ここで首を横に振れば、日本人の場合、答えの内容はかなり曖昧にしか相手に伝わらないと思う。

家を出るとき家人が、「あら、傘持ってかないの？」と言う。こういうときは、私のこのときの経験では、持ってゆくときは首をたてに二度振る、つまり「雨が降ると予報では言っている、傘を持っていけばいいのに」という相手の気持ちを、「ああそうだ、うっかりしていた」というつもりで受けるのが、相手にわかりやすい答え方である。反対に、持ってゆかないときは、首を横に振るのがよい。しかし、「あしたはお弁当いらないの？」というような、話し手の感情が

とくに籠められていない中立の否定疑問に対しては、フランス語方



式で首を振ると誤解が生じやすい。やはりことばを補って答えの内容を述べる方が確かだ。

声が出せるようになってから、このときの経験を、言語学者も含めて、私の友人に話して得た答えでも、また私自分の限られた体験から私なりにひきだした結論でも、日本語では否定疑問に対する「はい」「いいえ」の答え方は一定していないようだ。ヨーロッパ諸語では、フランス語、英語、ドイツ語、ポルトガル語など、それぞれを母語とする話し手に私が訊ねてみたかぎりでは、すべて一定している。つまり、答えの内容の肯定、否定によって決まるのだ。一見まぎらわしくみえる場合 (Aren't you up yet? No, I'm still in bed.) も、それは問いとは別の表現で答えるからで、もし問いと同じ言葉を使って答えるとしたら、答えの肯定、否定でYES、NOが決まるという原則に変わりはない。

つまり、フランス語などの場合は、OUI、SI、NONが、答えの内容に応じた、答え手本位の意思表示であるのに対して、日本語では、その時の状況や話して相互の関係に左右されながら、問いかけを受けることに重点があるのであろう。フランス語のOUIやNONがadverbeとされているのに対して、日本語の「はい」「いいえ」は感動詞とみなされ、学説によっては、これを感動の副詞とも呼ぶらしい。

これに関連して、この無言の行のあいだ私がおもしろく思ったことがある。私に用件で電話がかかってきた場合、私はそばにいる人に頼んで、先方に話だけしてくれるよう伝え、それに対する私の返事は、紙に書いてそばの人に送

話器の前で読んでもらった。ところが、私が耳に受話器をあて、声をたてずにじっときいている状態が、相手をひどく困惑させるらしいのだ。途中で、「話しにくいなあ」とか「困ったなあ」などとしきりに言う。このとき私は、前にフランス人の社会学者を日本で案内したとき、「君が人と話しながら絶えず発している、“エー”とか“ン”とかいうその曖昧な音は何だ」と訊ねられたことを思い出した。相槌を打つ 鍛冶の作業に由来するこのことばほど、こうした面での日本語の性格をよく表しているものはあるまい。

勿論、フランス語や英語でも相槌のことばは、はっきりした意味をもったものから曖昧な音にいたるまで用いられるし、OuiやYes、Oh ,no !なども相槌として用いられる。だが、その後むしろ外国で暮らすことの方が多くなった私が、久しぶりに日本へ帰って母語で話してみると、とくに話し相手の表情による反応が互いに確かめられない電話で話すときなど、日本語で「相槌」が話をすすめるのに大切である度合は、フランス語などの比ではないことを感じさせられる。ブラジルで育ち、成人してから日本語を習い、今日本にいて日本語もかなり達者に話せるイタリア系ブラジル人の友人からきいたことだが、日本人と電話で話しているとき、うっかり相槌を打つのを忘れていると、「おや、電話が切れたかしら」とか、「聞こえますか？」とすぐ言われるという。日本語の会話は、意思表示や自己主張のやりとりである前に、相手の言葉をまず「受ける」ことを重んじているようにみえる。

私がいまその中で暮らしている西アフリカのモシ族の人たちも、彼ら同士の会話で実によく相槌を打つ。モシ族では身分の上下や序列が重んじられ、挨拶が長く、意思表示がはっきりせず、謙遜と押し付けがましさを奇妙な結合がある等々、少し前までの日本の人間関係を彷彿させるものが多い。言語表現における合意の密度が高いことも、俳句などを生んだ日本社会と似ている。擬声(態)語も豊富だ。無論、安直に比較をするつもりはないが、人と人とのコミュニケーションのいろいろな面で日本を思い出させることの多いモシ族だが、n yee(肯定)とayo(否定)の用い方はまったくヨーロッパ式だ。

日本語で「はい」と「いいえ」に感動詞の性格を強くもたせている言語的あるいは社会的条件は何なのか、世界のほかの言語ではどうなのか、モシ族のあいだに暮らしながら、十年あまり前の小さな体験を思い出して、ふと気になることがある。

著者紹介：

川田順造 [かわだ.じゅんぞう] 1934年(昭和9)～。東京都生まれ。文化人類学者。主な著書に『曠野から』『無文字社会の歴史』『聲』『サバンナの音の世界』などがある。「『はい』と『いいえ』のあいだ」は、昭和53年に発表されたものであり、本文は『西の風・南の風 文

